

宮本 輝 「寝台車」論

藤 村 猛

要 旨

宮本輝の「寝台車」は、語り手の「私」が、現在と12年前、そして25年前の出来事を、寝台急行「銀河」の進行に合わせて語る作品である。まず最近のものとして、「私」と甲谷の仕事の状況が回想され、それがうまくいったときに二人が感じる「歎び」と「哀しみ」が印象的である。次に、「私」の小学生時代の事件―カツノリくんの転落事件―が、続いて彼の列車からの転落死と、祖父の嘆きが回想される。カツノリくんと祖父とのことを思い出し、「私」は「人生」を考える。が朝を迎え、「私」は人々の暮らしに触れ、「歎び」を感じる。

この作品は、列車や時間の進行によって、出会った人々を叙情的に描いているが、登場人物間の関係や描写が連続・一体のものではない。そのため、作品の求心力の弱さや山場のなさという欠点がある、と論じた。

キーワード

寝台急行「銀河」・死・「歎び」・「哀しみ」

一 はじめに

宮本輝の「寝台車」(『野性時代』昭和54年1月)は、作品集『幻の光』(新潮社 昭和54年7月)に収録された作品である。同作品集には他に、「夜桜」(『文學界』昭和53年4月)・「幻の光」(『新潮』昭和53年8月)・「こうもり」(『オール讀物』昭和53年12月)があり、「寝台車」の発表が最も遅い。

「寝台車」の作中の現在時間は、昭和五十二年ころの冬であり、大阪発東京行きの夜行急行「銀河」がその主舞台である。主人公の「私」は、某メーカー(工用機械製造メーカー)に十三年間勤めていて、三十五歳ころと推測される。

この作品には三つの時間が混在している。「私」の小学校三年生時(昭和二十七年ころ)、それから十数年後の大学三年生時(昭和四十年)、そして現在(昭和五十二年ころ)である。つまり、この作品は、「私」の寝台急行「銀河」での夜から朝までの旅行記であ

るとともに、二十数年前の「カツノリくん」の転落事件や、それから十数年後（昭和四十年）の「カツノリくん」の鉄道による事故死と彼の祖父との会話、そして現在（昭和五十二年ころ）の仕事や上司・甲谷への回想などが描かれている。

だが、作品の評価は高いものではない。安藤始氏は、この作品は「人の心の奥にある不可思議なるもの」を描こうとしていて、「人生の哀しい面と死への意識が共存していること」⁽¹⁾を指摘する。具体的には、「私」や甲谷の心の奥にある「不可思議なるもの」であり、「人生の哀しい面」は彼らが抱く感情であり、「死の意識」は「カツノリくん」の死を巡るものであろう。だが、主人公たちの持つ「不可思議なるもの」が感動のレベルまで至っているかは疑問であり、「人生の哀しい面」や「死の意識」も「私」に少なからず影響しているが、「私」を真に動かすものとは言い難い。

また酒井英行氏は、『寝台車』は、『私』という主人公を描いた作品ではない。『私』に与えられた役割は徹底した視点人物、言わばカメラである⁽²⁾とする。酒井英行氏が指摘する通り、作中で「私」は深く描かれていない。だが、作中の多くの出来事が「私」の視点から描かれているにしても、「私」の他者への感想や疑問などがあることから、「私」を「徹底した視点人物」、また無機質の「カメラ」とまでは言い切れないだろう。

この作品では「私」のみならず「私」が出会った人たち——「カツノリくん」や甲谷たち——も深く描かれず、かつ、描かれた時間が離れているためもあり、それぞれの事件や登場人物たちの関連性が分かりにくいという弱点がある。

以上のような作品の弱さを押さえつつ、作品の特徴を考えていく。

二 「銀河」と「私」——甲谷の回想——

作品冒頭で、夜十一時の大阪駅での寝台急行「銀河」や「私」の様子が描かれる。

（銀河）にはほとんど乗客はなかった。私は、書類やパンフレットや着換えなどがぎっしり詰まっている鞆を、いったん自分の席に置くと、刺すような冷気のたなびいている夜更けのプラットホームに出た。

反対側のホームには、やはりどこかどこか遠くへ行こうとしている同じような寝台車が停まっただけで、小太りの女が両腕に荷物をかかえ込んで走り乗るところであった。夜の十一時というのに、巨大な駅では、まだあらゆるものが沈滞せず、音や匂いや人影は寒風に巻き込まれて明滅し反響している。⁽⁹⁵⁾⁽³⁾

続いて、「私」が「銀河」に乗った理由が説明される。「私」は、仕事の関係で明朝の東京の会議に出席するため、それまでに着いておく必要があった。

取引き先との打ち合わせは、明朝の十時からであった。朝一番の新幹線に乗れば何とか間に合うのだが、私は少し低血圧ぎみで、朝の早いのは苦手だった。それできょう中に東京に着

き、そのまま都内で一泊する予定だったのだが、こちらでの内
部間の打ち合わせがまごついて、結局、最終の新幹線にも乗れ
なかつたのである。(95)

「私」は夜の新幹線に乗るつもりだったが、「打ち合わせがまごつ
いて」、最終の新幹線に乗ることができなかった。その時、同僚か
ら「銀河」の存在を知らされ、「仕事のスケジュール上、その夜行
に乗るのがいちばん具合良さそうだったし、久しく味わっていない
旅情のようなものに接してみたいという、かすかな衝動」(96)が
働き、「銀河」に乗ることになった。

回想が終わり、「銀河」の「発車のベルが鳴り、ホームを駆けて
来た学生風の一群とともに、私は列車に乗る」。(「銀河」は特急で
なく急行であり、当時は学生たちの利用も多かったのだろう。)

「列車はゆつくりと走」り、「私」は「夜行列車の緩慢な響きと、
かすかな人声によってさらに強められている独特な静寂で感傷的に
なり、淀川の鉄橋を渡って行く轟音すら心地良く感じ」(96)る。

「私」は列車の進行とともに感傷的になり、上司の甲谷とS社
(東京)との契約の経過を回想し始める。

数年前に「私」の勤め先では、「社内で直接に販売できる体制」
作りが行われ、「一介の機械屋にすぎなかった私」が「営業の分野
に駆り出され」(97)る。そのとき「日本でも一、二を争う商社の課
長職」(100)から「営業の凄腕として声価の高い甲谷」(97)がスカ
ウトされ、「私」の上司(営業促進部の部長)となる。「私」は彼の
ことを「世渡り上手の、目から鼻へ抜ける狡猾な才覚だけに富む輩

で、いわば大樹の陰でのみ、その能力を發揮できるタイプ」(97)
だと思い、彼と仕事のことではいさかうことがあり、悩む。だが、
「私」は、彼の「やくざっぽい言行に隠された一抹の小心さ」と、
「尊大な物言いと虚勢の裏に、一流商社での出世をやはり放棄せざ
るをえなかつた、甲谷の持つどうしようもない性格上の欠陥」(101)
を見抜く。それは、彼が「大舞台でしか映えることのない大技が得
意なくせに、そうした場所には不釣合な品の悪さと脂臭さを持つて
いた」(101)ことである。

二人の間は、最初はぎくしゃくしていたが、S社との交渉が進
み、「甲谷がセールスにおける手腕を發揮しはじめると、私のエン
ジニアとしての知識が、それを巧みに補佐する形となり、二人は決
して相容れないものを保ちながら、格好の相棒」(98)となる。

そして、S社の契約が取れると分かったとき、甲谷は「何気ない
口調でこう言った」。

「俺もお前も、これで結局半人前同士やったというこつちゃ。
俺の得意技と、お前の得意技を、ちゃんと二つとも兼ね備えて
るやつが、この世には、わんさかおるやろで」(98)

「半ば自嘲気味に、にやりと笑」うことから、甲谷は自分の限界
(欠点)を知っており、「半人前」意識は「日本でも一、二を争う商
社の課長職を捨て」るころから持っていたのだろう。対して「私」
は、自社の製品への自信と「私という人間の信用を積」(97)むと
いう誠実さで、S社に対応してきた。それらは甲谷にはないもので

あり、S社での成功は「私」の力が大きい。「私」はそれまで、甲谷の強引な指示に「強い反発」を感じていて、「甲谷の指示通りに事が運べば、私のこれまでの奮闘も、結局彼の手柄に変わってしまう」(102)と危惧していたが、甲谷はS社との契約を二人の仕事として、東京出張(最終的詰め)を「私」に任せる。

「俺は、あしたゴルフや」

あえてさりげない調子でつぶやきながら、甲谷は私に金の入っている封筒を手渡した。その、脂の浮いたぶあつい皮膚に包まれた、見ようによつては涙ぐんでいるようにも映る甲谷の瞳を睨み返したとき、私は不意に烈しい空しさを感じた。私はかつて、それ以上の充実感を味わったことはなかったし、またそれ以上の空しさを感じたこともなかった。その二つの相反するものは、あわただしい準備を終えて、ひとり大阪駅へ向かう私の心に重く拡がっていった。(99)

甲谷は東京(S社)に行くこともなく、ゴルフに行くと言う。仕事の詰めを任された「私」は、かつてないほどの「充実感を味わうが、同時に「烈しい空しさ」を感じる。前者は分かるが、後者の「空しさ」とは何だろうか。大きな仕事を果たした後の虚脱感(「寂寞感」(99))だろうか。

そのヒントとなるのは、この回想の前に車中で見た老人―「小ぎれいな・充分に恵まれた経済力の中にある」(99)老人―の存在ではないか。老人は外見は立派だが、「いかにも虚ろで哀しげ」(100)

な目をしていて、「私」は「なぜか、強く心惹かれ」る。甲谷と「私」の虚しさと、老人の哀しみは近いのではないか。だからこそ「私」は、

私に出張費を手渡したときの、甲谷の目も、またそれを受け取った瞬間の私の目も、きつと得体の知れない哀しいものを一瞬閃かせていたような思いに駆られたのである。(100)

甲谷と「私」は性格的には合わないが、仕事上ではいい相棒であり、二人とも「得体の知れない哀しいもの」を持ち併せていたのである。拡大して言えば、人生の持つ「虚しさ」や「哀しさ」の共有であろう。それらは仕事が行進しているときよりも、一つの山を越えたときに現れやすい。充実感と空しさの共存、これは、安藤始氏の言う「人の心の奥にある不可思議なるもの」の一つであろう。

続いて「私」は、「いやに沈みきった静かな光景」(101)を回想する。あるとき「私」が外出先から帰ってくると、甲谷が一人、「つくねんと部屋の隅を見やっていた」。

甲谷は身動きひとつせず、じっと部屋の隅に視線を注いでいた。私は声をかけようとしてやめた。狭苦しい事務所に充満した熱気も、冷房の風によつて舞いあがっている無数の埃も、ただ甲谷を取り巻いてひっそりしていた。(中略)

しばらくしてから、

「さっき、何を考えてたんですか?」

と私は訊いてみた。甲谷はちらっと目だけで私を見て、いかにも邪魔臭そうに机の上を片づけ始めた。

「S社とのことですか？」

「……いや、何でもあらへん」

そして甲谷は、思いがけない明るい笑顔を私に向けた。それは、一度も見せたことのない、無邪気な、何か失敗をみつづられた子供のような笑顔であった。私も思わず同じような笑いを返して、

「何か、……怪しいなア」

と言った。すると甲谷は、妙に寂しげなものを目尻のあたりに漂わせながら、いつもより固く肩をいからせ、急ぎ足で部屋を出て行った。乱雑に積み重ねられた書類や仕様書や、その他資料の山の陰で、肩と背に強い西陽を受けて、ひとり悄然とうなだれていた甲谷の小さなうしろ姿は、私の中から消えなかった。(103)

甲谷のいつもは見せない「ひとり悄然とうなだれていた・小さなうしろ姿」も、彼の一面であり、「無邪気な、何か失敗をみつづられた子供のような笑顔・明るい笑顔」も、彼が減多に見せないものである。それらは、日頃彼が見せる「あくの強い」「一種の豪宕さ」(98)とは違っていて、「私」が彼のことを「何も知らないのだ」(103)という思いとともに、「彼に対する憤りや不満を、その後、いつもすんでのところで、いさめてくれる」のだった。

つまり、前出の両者共通の「哀しさ」と、甲谷の「悄然さ」や

「明るい笑顔」が、「私」に甲谷に相容れないものを感じさせながらも、相棒意識を持ち、仕事を超えて、生きるということ(人生)に共鳴させたのではないか。(だが、その共鳴は短期のものであり、友情というレベルには高まらない。)

回想が終わり、車内の暖房や「断続的な強い横揺れ」(103)によって、「私」は眠る事ができず、ベッドに腰掛け煙草を吸っている、隣の老人の泣き声―「痛切な、どうにもこらえることの出来ない哀しみを感じさせる、低い長い泣き声」(104)―が聞こえてくる。「私」は寝ようとしても老人のことが気になり、頭が冴え、「声をかけることもはばかられて、そのまま耳を傾けていた」(104)。

「私」は、老人の哀しみに反発するのではなく浸っていく。それは自分の哀しみに浸ることでもある。

三 回想―「カツノリくん」―

場面は変わり、小学校三年生時の友人「カツノリくん」の回想が始まる。「カツノリくん」には両親がおらず、医師である祖父と暮らしていて、時折「私」の家に遊びに来ていた。

「ある夏の正午近く」、彼は模型の船を組み立てに、「私」の家にやって来る。

私たちは物置に使われている畳敷きの部屋に入り、錐や針金やナイフなどを道具箱から捜し出し、船の組み立てにかかった。(104)

この部屋は川に面しており、板壁の一角に扉があった。いつもは針金で固定していたが、その日はそうではなく、「カツノリくんはいつもと同じように、観音開きの扉に背をもたせかけ、そのまま、すたとんと川に落ち」(105)てしまう。その結果、

カツノリくんは、あおむけになって土佐堀川の水面に浮いていた。人形のように、身動きひとつせず、ぶかぶかと浮いているのだった。そして、そのまま私の顔を見ていた。(105)

「カツノリくん」はこのとき、転落のショックで失神していた。「私」は驚いて大声で母を呼び、ちょうど川で小舟を操っていた男に叫ぶ。

「おっちゃん、助けてエ。あの子が川に落ちたア」

私は悲痛な声をあげて、真下の川面を指差した。(105)

男は急いで「カツノリくん」の所に舟を寄せ、彼の腕をつかみ小舟に引き上げた。

カツノリくんはうつすら目をあけていたが、ほとんど意識はなく、私たちの呼びかける声にも反応を示さなかった。水もまったく飲んでいなかったし、息も脈もしっかりしていたが、青ざめた死人のような顔には、いつまでも血の色が返ってこなかった。(106)

「カツノリくん」は、「青ざめた死人のような顔」をしたまま、仮死状態であった。事件を知らされた祖父（医師）が駆けつけ、「カツノリくん」の手当をした。「カツノリくんが正気を取り戻したのは、夕刻であった」(106)。彼は川に落ちたとき「驚愕と恐怖で、一種の失神状態におちい」り、それが幸いして水を飲まず、「自分の命を救った」のであった。

カツノリくんの「人形のように」浮いている姿や、「青ざめた死人のような顔」は「私」に強い印象を与える。が、それらはその後の「私」の回想に登場しない。そのことを考えると、「私」にとつてそう重いものではなかったのかもしれない。

事件後、「私」は「カツノリくん」とは疎遠になっていたが、彼が医科大学の三回生のとき―昭和四十年、「私」も大学生であり、現在からは十数年前―に、中央本線の列車から転落して死んでしま^⑤う。

彼の葬儀に参列した後、「私」は風邪をひいたため、仕方なく彼の祖父の病院を訪れる。七十八歳になっていた老医師はかくしゃくとしていたが、孫の死に対して次のように言う。

「……死にぞこないは長生きするという話やけど、あいつはそうやなかったなア」

そう言っ^⑥て白い診察着を脱ぐと、ゆっくり膝の上でたたんだ。それから誰に言うともなくつぶやいた。

「父親の味も、母親の味も知らんと、可哀そうやった。あのとき死んでてもよかったなア」

私は黙っていた。どんな言葉も浮かんでこなかった。(109)

「私」は、老祖父のつぶやき(哀しみ)に答える術がなかった。老祖父は、「あのとき死んでもよかつたなア」と言うが、それだけ孫への愛情と悲しみが深かつたのだろう。

「カツノリくん」の死の原因は、「結局あいまいなまま」(107)であり、老医師は、「月が変わるとすぐ病院を閉め」、「出身地である山口県に帰った」(109)らしい。

「私」は、奇跡的に助かつた「カツノリくん」のその後の「十数年は、いったい彼にとって何だつたのだろう」(109)とぼんやり考える。(このときの「私」は二十一歳であり、人生の哀しみや喪失感を感じるには若すぎよう。)

この「カツノリくん」への問いかけは、三十五歳の自分の人生への問いかけにも通じる。「私」は小学校三年生(十歳)から大学三年生(二十一歳ころ)、そして現在(三十五歳)へと、自分の人生を思いやることになる。

「私」は生き残り、「カツノリくん」は若くして死んでしまう。彼の死は人生の悲しみや虚しさに通じていて、残された者が長く生きればそれらが減じる訳ではない。

だが、なぜ「私」は「銀河」の中で、「カツノリくん」やその祖父のことを思い出したのか。そのきっかけは、S社との取引成功による仕事の充実感と空しさであり、その空しさが「カツノリくん」の人生の虚しさに通じていったのかもしれない。また、安易な連想かもしれないが、車中の老人の悲しみから「カツノリくん」の祖父

が思い出され、関連して「カツノリくん」の事件を回想したのではないか。もしくは彼の死が列車と関係していたからかもしれない。だが、いずれにしても、「カツノリくん」の回想は、唐突の感がある。

四 「銀河」の朝

場面は現在の「銀河」に戻り、豊橋を過ぎる(時刻は三時半すぎ)ころとなる。

老人の泣き声はいつのまにかやんでいた。私はカーテンのほうに背を向け、何も考えまいと努めた。(中略)老人の泣き声の終わったことでひとつのきりがついたように、私を取り囲んでいたあらゆる物音は消えていった。不思議な安心感があつた。

(109)

「私」は「何も考えまいと努め」る。それは大人の知恵かもしれないが、ここで「私」の感じた「不思議な安心感」とは何か。老人の泣き声が終わったこと、そして「カツノリくん」や祖父の回想が終わったことによる安心感か。

考えてみるに、「私」に安心感が生じたのは、車中の老人の哀しみと「カツノリくん」祖父の哀しみが一緒になり、一つの「記憶」となったためではないか。

「私」は、両者の哀しみを感じ得る人間である。そして、回想レ

ベルの悲しみは人をして浄化させ、時として甘い感傷的なものになり、やがて心の安定から安心へと動いていく。いわば、悲しみが安心感を呼ぶ⁽⁶⁾のではないか。

「私」は「少し眠」り、「目をあけると早朝の眩しい光が」、「車内に満ち溢れていた」。老人のベッドは空で、「私」は老人が「どこか夜更けの駅に降りた」⁽⁷⁾と推測し、身繕いをする。

「私」は沿津駅で弁当を買い、「窓ぎわに凭れて地方都市の朝に眺めい」る。「急ぎ足で流れていく人々の口元から、白い息がこぼれてい」⁽¹⁰⁾くのが見え、「私」は夜の孤独や悲しみから、朝（の光や人々）の登場により、肉体は疲れているものの蘇っていく。

列車は走り、「私」は熱海の海を見ながら、「食欲はなかったけれど、何も考えずに」、弁当を「ただ食べつづけ」る。虚脱感とともに、肉体の疲労もあつたろう。「ガラス窓に、自分の横顔がうつすら反射していた」⁽¹¹⁾。「私」は弁当を食べ終わると、鞆から書類の入った紙袋を取り出した。

ひとつの仕事を完成させた歓びが、ふいに私のもの憂い体の中を走って抜けた。早朝らゴルフに行くと言っていた甲谷は、もう出かけたろうかと私は思った。⁽¹¹⁰⁾

「私」は「もの憂い体」でありながらも、朝の光と人々の生活を見て、そして鞆の中の書類（S社との取引成功）によって、「ひとつの仕事を完成させた歓び」を感じ、甲谷を想う。（そして、列車は東京に近づき、作品は終了する。）

このときの「私」には、「歓び」と「もの憂さ」が共存しており、そういった状態の中、相棒である甲谷を想う。だが、彼の存在は身近なものと言うよりも、大阪・東京という実際の距離感や、一つの仕事が終わったという心情から、どこか遠い存在のように感じられる。

以上のように、「私」は「カツノリくん」や老医師、そして甲谷たちを旅情の中で、「歓び」や「物憂さ」（虚脱感）を感じながら思いついている。

五 ま と め

この作品は、夜行寝台急行（「銀河」）の進行や「私」の状況、そして夜から朝への移り変わりに応じて、主人公が出会った人々を回想し、それぞれの「場面」を蘇らせている。ただ冒頭で述べたように、それぞれの時期の違いもあり、かつ、登場人物間の関係の弱さにより、作品の求心力を弱くさせている。例えば、甲谷と「私」は仕事上の関係でしかなく、「私」と「カツノリくん」は、子供時代の転落事件で結びついているにすぎない。（「カツノリくん」の老祖父とは数回の出会いにすぎず、「銀河」車中の老人は行きずりの人物でしかない。）

つまり、この作品には、夜行寝台急行（「銀河」）による「私」の旅情があるものの、甲谷や「カツノリくん」との関係がそんなに強いものではないため、作品に統一感や山場がない。しかも、「私」の複数の感情の共存—例えば、「私」の仕事による達成感（歓び）

と「哀しみ（虚しさ）」の共存——が深く追求されていないため、人間の持つ「不可思議なるもの」が感じられながらも、あまり生動していないという弱さがある。

(注)

- (1) 安藤始『宿命と永遠—宮本輝の物語—』（おうふう 2003・10）
- (2) 酒井英行『宮本輝論』（沖積舎 1998・9）
- (3) 本文の引用は、『宮本輝全集』13（新潮社 1993・4）による。（ ）内の数字は、全集のページ数である。
- (4) 「青ざめた死人のような顔」から、「泥の河」の銀子の母を連想する。違いの一つは銀子の母は、主人公を強いまなざしで見返すことである。「カツノリくん」は失神していて、他者を見ていない。
- (5) 酒井英行氏は、「カツノリくん」と「幻の光」中の「あんた」（語り手・ゆみ子の亡き夫）との近さを、「カツノリくんが『あんた』と双生児であることは明白であろう」と指摘して、「カツノリくん」の死は、「限りなく自殺に」近いとする。（引用は注（2）による。）
だが、「カツノリくん」が事故死か、自殺かは分からない。それを推測させる心情描写や暗示するものは、作品中には書かれていない。
- 「幻の光」の場合、「あんた」は自殺する前に、ゆみ子に別人の顔を見せ、「なんか元気がなくなってくるんや」（34）と洩らしている。「カツノリくん」に関しては、自殺の可能性はあるとしても、その真偽は不明である。
- (6) この点については、「幻の光」のゆみ子の、不幸と幸福の共存を想起する。他に「寝台車」では充実感と空虚感の共存がある。だが、それらは最愛の夫を自殺で失ったゆみ子ほど、強いものではない。
- (7) 酒井英行氏は、車中の老人は「駅に降りたのではなく、列車から飛び下り自殺を図ったのである」と推察している。（引用は注（2）による。）そういう読みも可能かもしれないが、断定するまでには至らないだろう。